

建築家の東京論にみる現代都市に対する視点と展開

The Viewpoints and Their Developments in the Architect's Theory on Tokyo

奥山研究室 13M17316 藤代 江里香 (FUJISHIRO, Elica)

1. 序

1-1. 研究の背景と目的 東京は関東大震災と第二次世界大戦の被災により二度にわたる壊滅的な被害を受けており、現在の東京の物的な様相は第二次世界大戦後に構築されたものである。このように東京は、物質的な履歴を辿ることが困難な都市であるにもかかわらず、新しい都市の魅力を発見する場として多くの建築家¹⁾に論じられてきた。東京を主題²⁾とした建築家の論考（以下、東京論）には、歴史的側面から東京を記録するものや、現代的事象に着目し今後を活用する指針を提唱するものなど広範な内容がみられ、そこには現代都市を捉える方法が集約しているといえる。そこで本研究では、現代日本の建築家の著した東京論について、東京をいかなる視点から記述し、それに基づいてどのように論を展開させるか（以下、展開方法）といった観点から検討することで、建築家の現代都市に対する思考の枠組みの一端を明らかにすることを目的とする。

1-2. 資料対象 本論文では現代の日本の建築家が著した論考のうち、タイトルまたはサブタイトルに「東京」が含まれるものを資料とする（全68資料³⁾）。資料数の年代的な傾向を検討すると、東京論は80年代から増加し、現在もなお多く語られているといえる⁴⁾。

2. 建築家の東京論の視点と展開方法

2-1. 視点の内容 資料とした東京論から、東京をいかなる視点から記述しているかといった内容を抽出した

ところ（図1）、その内容は多岐にわたっていた。そこで、KJ法⁵⁾を活用して、それらを相互に比較、検討した。その結果、都市空間や都市に立つ建築などといった実体的側面としての視点から論じる【物的視点】（以下、【物的】）と、人々の生活やそれを規定する社会的な仕組みなどといった営為的側面から論じる【活動的視点】（以下、【活動的】とする）で捉えることができた（表1）。こうした内容に加えて、駅前における東京の混沌とした都市空間といった視点（【物的】No.29）や特定の場所における大衆の欲望に基づいた人々の活動といった視点にみられるように、視点（【活動的】No.19）においては、その意味的水準は異なるものの、部分的な観点から論じようとしているものがみられた。一方で東京を俯瞰的に捉えた都市計画といった視点（【物的】No.30）や東京全体の社会構造が国際化を強いられている状況といった視点（【活動的】No.48）などにみられるように、全域的な観点から論じようとしているものもみられた。こうした観点から視点についてそれを論じる際のスケールから、[局所]、[全体]、およびその双方から論じる[局所+全体]といった3つに分類した。

こうした観点をふまえて、視点の内容の数的な傾向を検討すると、【物的】では[局所+全体]が全体の半数を占めている（23/46資料）のに対し、【活動的】では[全体]が半数以上（12/22資料）みられることが分かった。このことから、建築家は実体的側面から東京を論じる場



合、空間の特徴を断片的小おび俯瞰的に横断しながら異なる尺度で語る傾向があり、個々の建築空間の集積により東京の特徴を見いだしているといえる。一方、東京で生じる出来事や人々の活動を論じる際には社会現象による都市の変容と大枠的な観点から語る傾向にあることが読み取れる。

2-2. 東京論における展開方法 展開方法に関する記述からは、前節で検討した東京論の視点に基づいて肯定的に展開するものと否定的に展開するものがみられたため、これを東京論を展開する際の態度⁶⁾として位置づけた(表2)。さらに展開方法に関する記述には、例えば、東京の観察や自己の経験を論ずることに徹しているものと、それに加えて改良の可能性や抜本的な改革に関する提案を述べるものがみられた。とくにそうした提案を述べる資料に着目してその形式を検討すると、パースや地図などにより東京の未来像をスケッチによって表現した雰囲気のみを表現する提案と、動線や建築の意匠や構造に考慮して具体的な提案を行うといった詳細に描写されている提案として分類できた(表3)。

2-3. 視点と論の展開方法の関係 東京論における建築家の視点と展開方法の対応関係を検討する(図2)。その結果、【物的】では肯定的に論が展開される傾向がみられた。一方、【活動的】では否定的に論が展開される

傾向がみられた。このことから、東京の実体的側面と非実体的側面のどちらに着目するかによって、建築家が東京を論じる態度に違いがあることがわかった。さらに【物的】における〔局所〕および〔局所+全体〕において肯定的に論が展開される傾向が強いことから、個々の建築空間の特性といった局所的な東京の空間的特徴を論じる際に建築家の肯定的態度が強くあらわれることがわかった。

2-4. 東京論の一般性 また、建築家が論を展開するにあたって、東京だけでなく都市一般に通底するものとして自身の論を敷衍しようとする資料もみられたため、そうした記述の有無から東京論の一般性を整理し、視点との関係を検討した(表4)。【物的】では都市一般に敷衍する記述のないものが多く、なかでも〔局所〕と〔局所+全体〕においてはその傾向が顕著であることが分かる。これに先の傾向を加味すると、建築家が個々の建築や、その集合で構成される東京を肯定的に展開する際には、その魅力を東京に独自のものとして捉えている傾向があるといえる。

3. 東京論における着目対象のひろがり

本章では、東京論を具体的に論じる際に着目する対象⁷⁾(以下、着目対象)について、その種類と想定される時間的な属性から検討することで、東京論の内容をよ

表1 視点の内容の分類

局所				L	局所+全体				L+W	全体				W	
物的 視点 M	欧米と異なるカオティックな都市空間	11,33 43	機能が混在する建物によって構成されるカオスな街並み	42	江戸の特徴をもった空間によってつくられる都市	4,5,10 31,58	豊かな生活環境の再考によってつくられる街	23,46 49	東京の都市計画	15,26,27,28,30,35,64					
	東京を特徴づけるポストモダニズム様式の建築	29	東京の象徴として残すべき建築	18	秩序ある空間によって構成される国際的な基準を満たす都市	41,59 51,63	多様な活動を許容する都市型建築によってつくられている都市	34,39 45	一部の権力者ではなく市民によってつくられた骨格	3,6,8,17,54					
					土地との結びつきによってつくられている都市	24 57,67	水辺のポテンシャルを読み解き活かすことで形成する都市	21,50	固有な特徴のある地域の集積によってつくられた都市	9,38					
	多様な建物により構成される都市空間	38	変容しながらも時間が堆積された都市空間	65	地形的特徴によってつくられている都市	60	建物の変容の集積によって立ち現れる都市	55	既存の制度の活用を活用したまちづくり	53,68					
46					8					22					16
活動的 視点 P 22	都市開発によって変容する都市環境における人々の活動		19,36,47,56,62		社会状況の変容とそれに伴う都市構成要素の変容	13,16			都市が過密する状況	1,2	国際的な都市としての社会システム	12,14 32,48			
				5	社会状況の変容とそれに伴う生活環境の変容	7,25,52		5	環境負荷への対応可能な仕組み	20,44 61	防災システム	37,40 66			
															12

表2 建築家の態度

肯定的 +	47	否定的 -	21
視点に基づいて東京を認めるもの		視点に基づいて東京に対して問題を提起するもの	

表3 提案の形式

雰囲気表現する	8	詳細を描写する	9
パースや地図などにより概略を提示するもの		動線や建築を考慮して具体的な提案を行うもの	

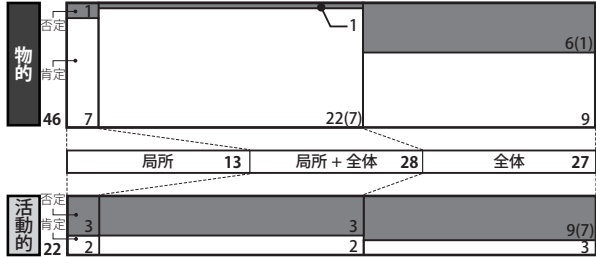


図2 視点の内容と論の展開形式の関係

図注: 提案の数は () 内に示す

表4 東京論の視点と一般性の関係

	都市一般に敷衍		東京独自に限定	
	L	2	6	
物的	L+W	9	14	
	W	7	18	8
活動的	L	2	3	
	L+W	3	2	
	W	7	12	5

り詳細に捉える。

3-1. 着目対象 着目対象を空間を規定する都市構成要素と活動や文化に関する生活・文化要素に大別した（表5）。とくに都市構成要素は建物と大規模開発といった建築系要素と土木系要素に分類した。その結果、着目対象に関しては建物と大規模開発といった建築系要素が多くみられた。

3-2. 時間の射程 東京論で想定される時間の幅については着目対象における時間的な属性から、過去のある時代に着目し現状を論じるものと東京の現状にのみ着目するものの2つに分類した（表6）。

3-3. 建築要素の組み合わせ 先で述べたように、着目要素に関しては建物と大規模開発といった建築系要素が多くみられたため、それらの組合せを整理し、他の着目対象との関係を表7に表した。特に、土木系要素との組合せをみると、建築系要素のうち建物のみに着目する場合、自然・景観が組み合わせられている。次に、建築系要素のうち大規模開発にのみ着目する場合、自然・景観と土木構造物とが同時に論じられる傾向がある。一方、建物と大規模開発の両方に着目する場合では自然・景観との組合せがみられなかった。

4. 東京論の総体

4-1. 視点と建築家の態度および着目対象の関係 表7では前章で検討した建築系要素の組合せごとに、2章で検討した視点と建築家の態度を示している。この表より、建物のみに着目する場合を【物的】に基き肯定的に展開する傾向がみられた。（22/25 資料）。一方、大規模開発のみに着目する場合と建築系要素の組合せに着目する場合は【活動的】に基づいて否定的に展開する傾向がみられた（8/15 資料）。このことから、建築家が局所的な東京を特徴づける建築の性格といった視点から建物に限定して着目する場合は東京の魅力を評価することが読み取れる一方、大枠で東京を捉え開発を対象に論じる場合には、問題を指摘する傾向にあるといえる。さらに、建築系要素に着目しない場合、視点に関わらず肯定的に論を展開させることが多かった（15/19 資料）。

4-2. 視点と態度および着目内容の変遷 2章で検討した東京論の視点と態度および3章で検討した着目内容を通時的に比較した（図3）。その際、時代別の資料数の傾向から、東京論が多く語られるようになった80年代以降に着目して検討する。視点の内容に着目すると、80年代と90年代以降において【物的】と【活動的】

表5 着目対象の分類

都市構成要素	建築要素	建物	35	集合住宅 町屋
		大規模開発	26	街区を超えた開発 沿線開発
	土木系要素	景観自然	19	武蔵野台地、東京湾 水辺空間、花の名所
		土木構造物	12	橋、空港 鉄道網
生活・文化要素		街路・オブジェ	8	路地 街路樹
		アクティビティ	41	人々の生活様式 墨田区の協働
		経済産業	5	日本の GDP 国別競争ランキング
		思想芸術	27	モダニズム 和洋折衷、メタボリズム

表6 時間の射程

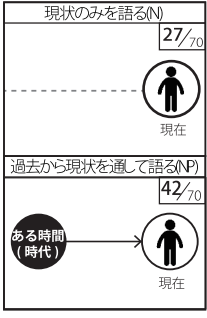


表7 建築要素のくみあわせからみる着目対象のひろがり

					都市構成要素		生活文化要素			時間的	視点	態度
no.	タイトル	著者名	発行年	土木	街路	活動	経済	思想	射影			
建物のみ	21. 水辺都市	陣内秀信 他	'89	●	●	○	○	○	NP	M	+	
	22. 東京キーワード図鑑	陣内秀信	'89	●	●	○	○	○	NP	M	+	
	5. 見えてくくれる都市	横文彦	'80	●	●	○	○	○	NP	M	+	
	24. 東京の「地震」	鈴木博之	'90	●	●	○	○	○	NP	M	+	
	31. 東京	陣内秀信	'92	●	●	○	○	○	NP	M	+	
	65. 東京断想	マツコ・オダヅキ	'14	●	●	○	○	○	NP	M	+	
	10. 東京の空間人類学	陣内秀信	'85	●	●	○	○	○	NP	M	+	
	23. 現代に生きるまち	佐藤滋	'90	●	●	○	○	○	NP	M	+	
	7. 東京の町を読む	陣内秀信 他	'81	●	●	○	○	○	NP	P	+	
	8. 東京都市の明治	初田亨	'81	●	●	○	○	○	NP	M	+	
	11. 東京ポスト・モダン	松葉一清	'85	●	●	○	○	○	NP	M	+	
	15. 郊外住宅地の系譜	山口廣	'87	●	●	○	○	○	NP	M	+	
	17. わたしの東京学	陣内秀信	'88	●	●	○	○	○	NP	M	+	
	18. 帝都復興せり!	松葉一清	'88	●	●	○	○	○	NP	M	+	
	19. 東京発・都市の現在	松葉一清	'88	●	●	○	○	○	NP	P	+	
	29. 東京現代建築ガイド	松葉一清	'92	●	●	○	○	○	NP	M	+	
	34. モダン都市の空間博物館-東京	初田亨	'95	●	●	○	○	○	NP	M	+	
	38. 建築ガイド・都市ガイド	鈴木博之 他	'98	●	●	○	○	○	NP	M	+	
	42. メイドイントーキョー	塚本由晴 他	'01	●	●	○	○	○	NP	M	+	
	43. 篠原一男経由東京発東京論	篠原一男 編	'01	●	●	○	○	○	NP	M	+	
	45. 東京計画2001	岡河真 他	'01	●	●	○	○	○	NP	M	+	
	49. 江戸東京の路地	岡本哲志	'06	●	●	○	○	○	NP	M	+	
	58-a. 『江戸市』誕生	持田庄一	'12	●	●	○	○	○	NP	M	+	
	64. 江戸・東京の都市史	松山康	'14	●	●	○	○	○	NP	M	+	
	67-a. 都市のイメージはだれなのか	北山恒	'15	●	●	○	○	○	NP	M	+	
大規模開発のみ	20. TOKYO大改造	黒川紀章	'88	●	●	○	○	○	NP	P	+	
	37. 環境革命時代の建築	尾島俊雄	'98	●	●	○	○	○	NP	P	+	
	12. 東京-21世紀の構図	尾島俊雄	'86	●	●	○	○	○	NP	P	+	
	14. 東京大改造	尾島俊雄	'86	●	●	○	○	○	NP	P	+	
	44. 地球環境と東京	河原一郎	'01	●	●	○	○	○	NP	P	+	
	3. 都市学入門	黒川紀章	'73	●	●	○	○	○	NP	M	+	
	35. 積み木の都市東京	田村明	'97	●	●	○	○	○	NP	M	+	
	40. 都市居住環境の再生	佐藤滋	'99	●	●	○	○	○	NP	P	+	
	41. 東京のランドデザイン	伊藤滋	'00	●	●	○	○	○	NP	M	+	
	58-b. 『江戸市』誕生	持田庄一	'12	●	●	○	○	○	NP	P	+	
	63. たたかう東京	伊藤滋	'14	●	●	○	○	○	NP	M	+	
	66. 東京都市計画の遺産	越澤明	'14	●	●	○	○	○	NP	P	+	
	26. 東京の都市計画	越澤明	'91	●	●	○	○	○	NP	M	+	
	32. 未完の東京計画	石田頼房	'93	●	●	○	○	○	NP	M	+	
	32. しなやかな都市東京	市川宏雄	'94	●	●	○	○	○	NP	P	+	
開発×建物	39. パブリック・プロジェクト	都市環境構成会	'99	●	●	○	○	○	NP	M	+	
	2. 東京2,000万都市の改造計画	馬場知己	'66	●	●	○	○	○	NP	P	+	
	1. 東京計画1960	丹下健三	'61	●	●	○	○	○	NP	P	+	
	48. 東京再生	小林正美 他	'03	●	●	○	○	○	NP	P	+	
	53. 東京モデル	日康康雄 他	'09	●	●	○	○	○	NP	M	+	
	55. TOKYO METABOLIZING	北山恒 他	'10	●	●	○	○	○	NP	M	+	
	9. 明治の東京計画	藤森照信	'82	●	●	○	○	○	NP	M	+	
	27. 東京都市計画物語	越澤明	'91	●	●	○	○	○	NP	M	+	
	28. 江戸東京まちづくり物語	田村明	'92	●	●	○	○	○	NP	M	+	
	52. 新都市論TOKYO	隈研吾 他	'08	●	●	○	○	○	NP	P	+	
	67-b. 都市のイメージはだれなのか	北山恒	'15	●	●	○	○	○	NP	M	+	
	4. 東京の原風景	川添登	'79	●	●	○	○	○	NP	M	+	
	60. 東京「スリパチ」地形散歩	皆川典久	'12	●	●	○	○	○	NP	M	+	
	13. 東京の橋	伊東孝	'86	●	●	○	○	○	NP	P	+	
	50. 東京エコシティ	法政大13研	'06	●	●	○	○	○	NP	M	+	
どちらでもない	59. 外濠	法政大13研	'12	●	●	○	○	○	NP	M	+	
	61. 水の都市江戸・東京	陣内秀信	'13	●	●	○	○	○	NP	P	+	
	6. 東京時代	小本 新造	'80	●	●	○	○	○	NP	M	+	
	16. 東京路上博物館	藤森照信 他	'87	●	●	○	○	○	NP	P	+	
	25. どうなるどうする東京	日本建築学会	'91	●	●	○	○	○	NP	P	+	
	33. 東京の美学：混沌と秩序	芦原義信	'94	●	●	○	○	○	NP	M	+	
	36. 東京現代建築はめ殺し	建築三昧人	'97	●	●	○	○	○	NP	P	+	
	46. 東京育ちの東京論	伊藤滋	'02	●	●	○	○	○	NP	M	+	
	47. 趣都の誕生	森川嘉一郎	'03	●	●	○	○	○	NP	P	+	
	51. グローバルフロント東京	市川宏雄	'08	●	●	○	○	○	NP	M	+	
	54. 東京っ子の原風景	田村明	'09	●	●	○	○	○	NP	M	+	
	56. シブヤ遺産	村松 伸	'10	●	●	○	○	○	NP	P	+	
	57. 新・ムラ論TOKYO	隈研吾 他	'11	●	●	○	○	○	NP	M	+	
	62. いま東京と東京論を問い直す	門脇耕三 他	'13	●	●	○	○	○	NP	P	+	
	68. 東京の制度地層	齋藤伸	'15	●	●	○	○	○	NP	M	+	

図注. 視点と態度の記号は表2と表1および表6に示す

の割合に違いがみられたため、それをふまえて考察する。

まず、80年代では【活動的】から論じられることが多く、その際、着目対象を建物に限定し、過去から現在までの長い時間の射程で東京を語られる傾向がみられた。このことから、建築家は東京における人々の活動に興味をもち始め、それと建物との関係を歴史的に論じる傾向があるといえる。具体的には資料 No.10「東京の空間人類学」や No.16「東京路上博物誌」のような東京を歩きながら、そこに現れてくる出来事と建物との関係を歴史性を含めて記述したり評価したりするものがある。次に90年代以降について検討する。90年代以降では、80年代と比べて【物的】の割合が高いことから、その内訳に着目すると、2000年以降に〔局所+全体〕の割合が高くなることが分かる。そこで90年代と2000年代以降に分けて検討する。90年代では、80年代と比べ、【物的】から論じることが増えると同時に着目対象の偏りが建物から大規模開発へと移行し、否定な論じる傾向にあることがわかる。このことは、バブル景気による過剰な不動産投資による都市の変容および阪神淡路大震災による東京の構造への疑念が起因のひとつとしてあると考えられる。さらに2000年を境にして、【物的】の割合は変わらないが〔局所+全体〕が増加する傾向がみられ、現状のみを想定する傾向がみられるようになったことから、従来に比べて東京論における視点の種類のひろがりが増えてきたと考えられる。さらに建築的要素に10年代において着目しない論考が徐々に増えて、着目する論考とほぼ同数になり、肯定的に論じつつ提案を行う傾向

がみられる。これは、東日本大震災などを契機として社会から求められる職能として共同体のための場を創造するといったハードだけではないソフトの設計という観点が重視されている状況を反映したものと考えられる。

5. 結

以上、本研究では建築家の東京論における視点とそれを基軸にした論の展開形式および着目対象のひろがりを検討することで東京論を比較検討し、現代都市東京に関する建築家の思考について整理した。その結果、建築家の東京論は物的な視点と、人々の活動的な視点で捉えられ、さらに局所的と大局的な観点で内容を分けることができた。着目対象は、建物と大規模開発の組合せで位置づけた。しかし、東京論の視点と論の展開および着目対象の関係において通時的に検討した結果、東京論においての視点は時代状況の影響を受けやすく、その都度社会との応答を試みていることが考えられる。そこでみられた通時的な傾向は、今後の建築家の言語的活動に対する新たな方向性を示すものとする。

注. 1) ここで言う建築家とは、主に建築や都市についての表現活動をしている建築意匠家や建築歴史家をさす。

2) ここで主題とは、建築家がどの側面から東京を論じているのかを読み取るために、論述の主旨を含んだ部分をさす。

3) 全資料 68 のうち書籍は 66、雑誌は 2 であった。

4) 60 年代に 2 件、70 年代に 2 件、80 年代に 18 件、90 年代に 18 件、00 年代に 16 件、10 年代に 14 件みられる。

5) 川喜田二郎：『発想法』（中央公論社、1967 年）内の KJ 法を用いている。

6) 建築家の態度は、68 資料からそれぞれ単数抽出する。

7) 着目対象は 68 資料から 70 論述抽出する。

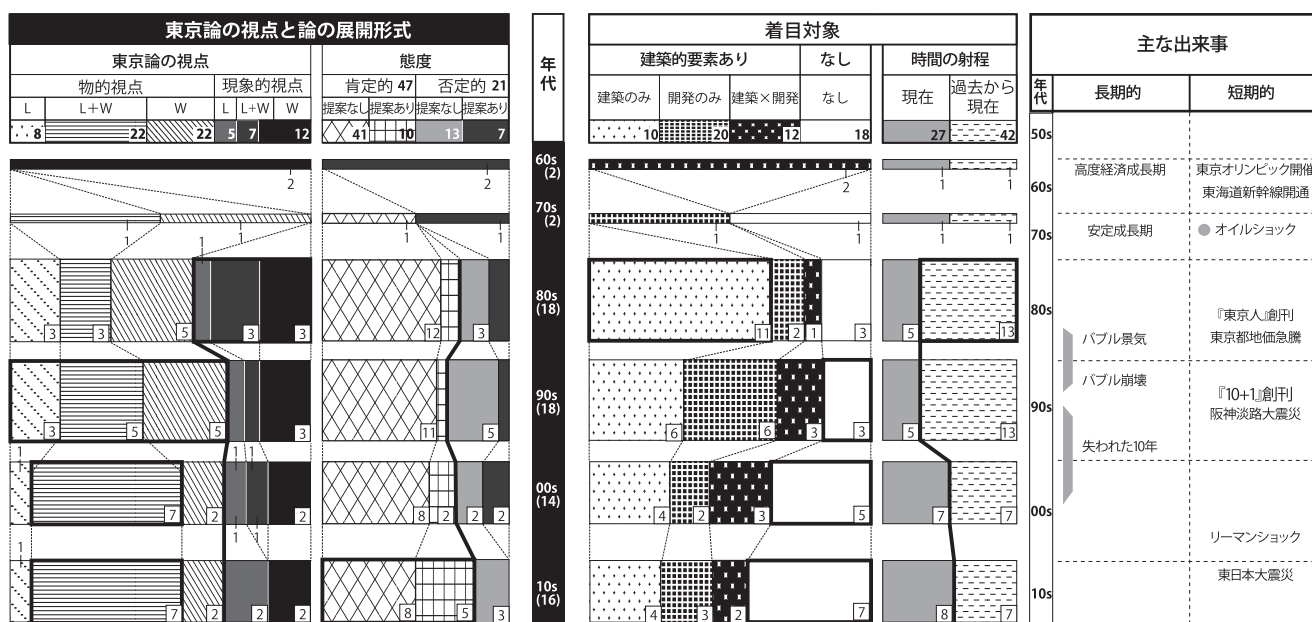


図4 1960年代以降の建築家の東京論にみる現代都市に対する視点と展開の変遷